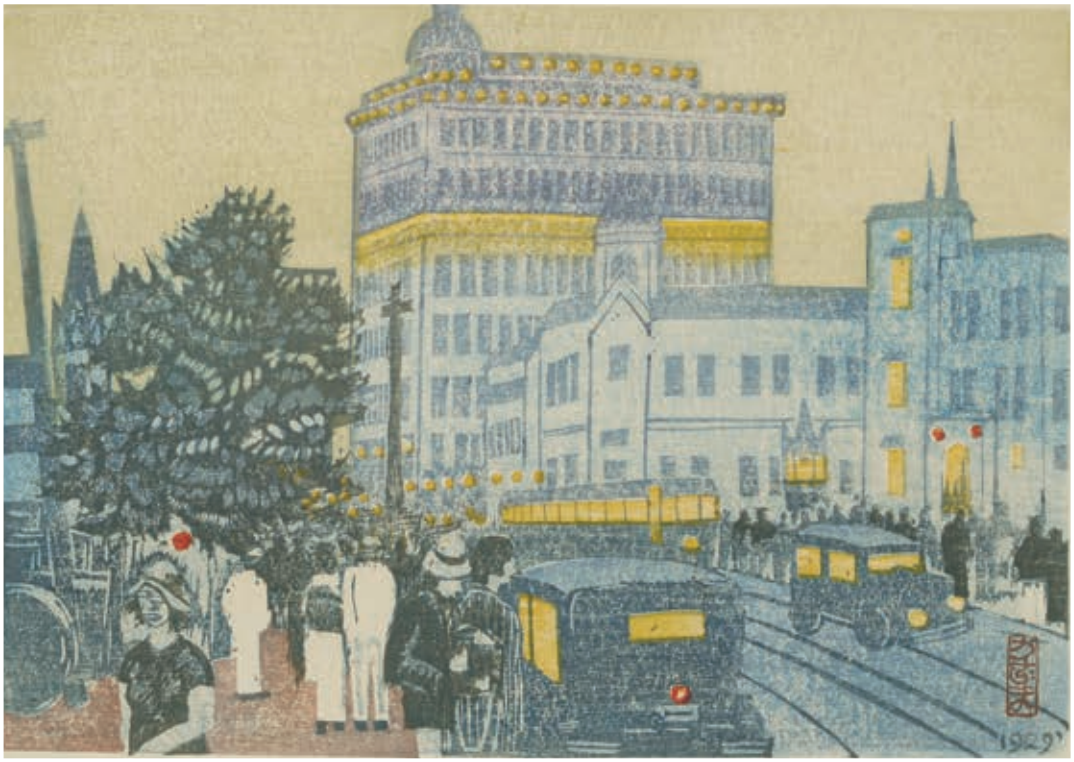
国立国会図書館月報

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2021.7/8



あるアジア系アメリカ人が遺したもの
―ヨシオ・キシのコレクションより―

新連載　本をまもる　保存・修復の道具

表紙画家セレクション

723/724 号　2021 年 7/8 月

国立国会図書館月報

NO. 723/724
JULY/AUGUST 2021

CONTENTS

1 ARTISTIC JAPAN／芸術の日本
—西欧で生まれた日本美術専門誌
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

5 あるアジア系アメリカ人が遺したもの
—ヨシオ・キシのコレクションより—

6 あの人の蔵書　第5回
キシ・コレクション、ヨシオ・キシ及びアイリーン・ヤーリン・スンコレクション

10 ディラン・イェーツさんインタビュー

16 本をまもる　保存・修復の道具
①切る、折る

24 表紙画家セレクション　第三輯

28 ミニ電子展示「本の万華鏡」第29回
めーきゃっぷ今昔
——江戸から昭和の化粧文化——

15 館内スコープ
紙よりも時代に取り残される？　電子資料

23 本屋にない本
『太宰治三鷹とともに』

30 NDL Topics

表紙：
『大東京新景版画集』[2] から「銀座の薄暮」
織田一磨 画　日本版画社 編　日本版画社
昭和 4-5　33×42cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1015635/2（モノクロ）

今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

ARTISTIC JAPAN / 芸術の日本
―西欧で生まれた日本美術専門誌

戸鹿野陽子

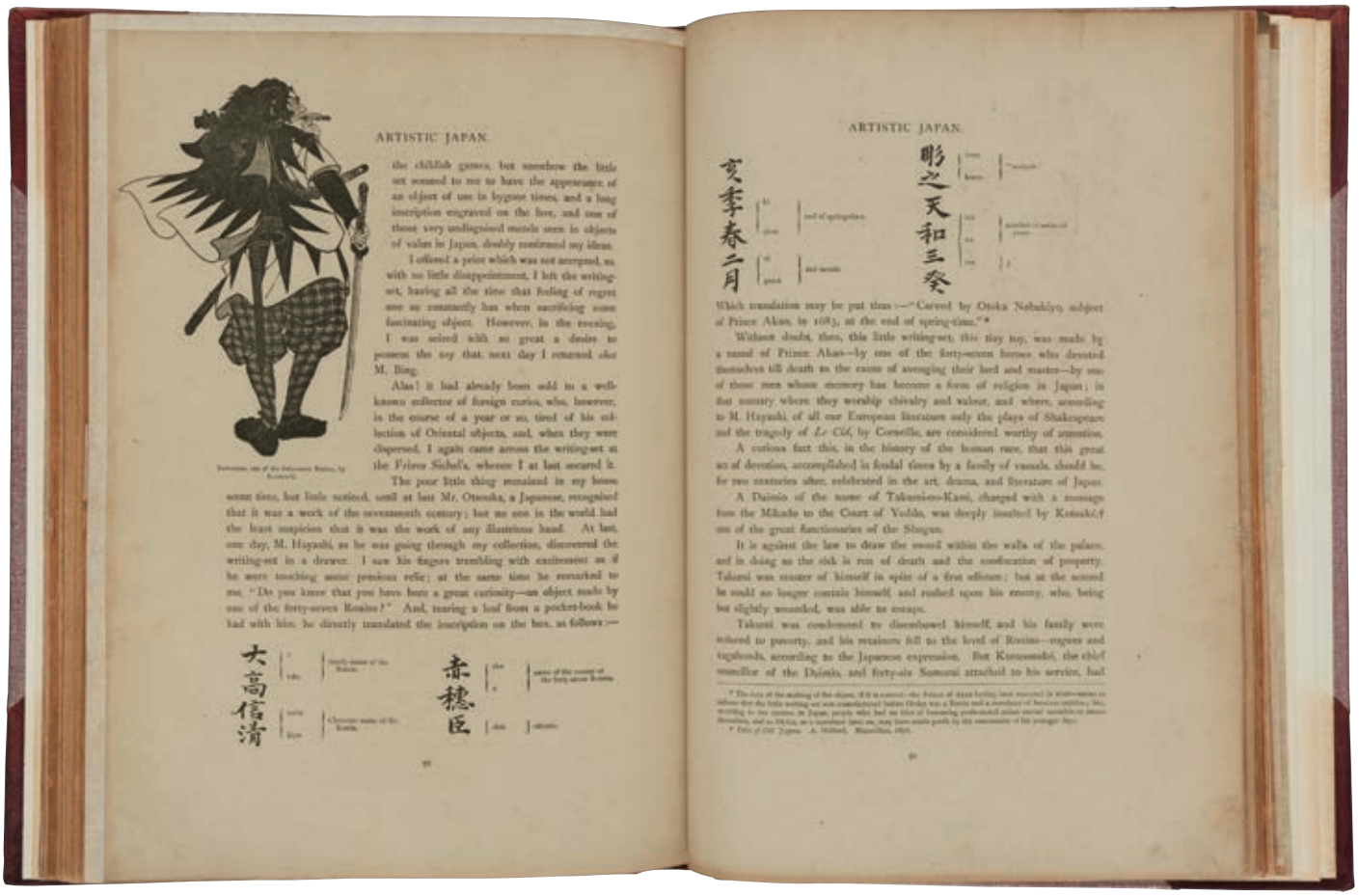
Artistic Japan illustrations and essays
Collected by S. Bing, S. Low, Marston, Searle & Rivington, [1888]-91, 5 v. (paged continuously) ill. (some col.) . 34 cm
<請求記号 A-92>

1888年5月創刊号の表紙。歌川広重「雪中芦に鴨」。英語版価格は1号2シリング。

19世紀後半の西欧では、日本の開国により本格的に流入した日本美術に高い関心が払われ、西欧美術の新たな表現方法として取り入れようとする「ジャポニスム」という文化現象が生まれました。美術史を飾るその一時代の中で、日本と西欧の美術をつなぐ役割に大きな功績を残した一人が、アール・ヌーヴォーの名付け親でもある美術商サミュエル・ビング（1838-1905）です。

ドイツで商人の家系に生まれたビングは、パリへ移り、そこで日本美術商として店を開きました。ビングの店には、日本での収集や、横浜のドイツ領事であった義兄の協力で確固たるものとなった輸入ルートにより構築されたコレクションが並び、多くの日本美術愛好家が足を運びました。かのファン・ゴッホも、パリ時代にはビングの店で浮世絵を求めたといいます。

1867年、1878年に開催されたパリ万国博覧会を契機に日本への関心は高まり、1880年代以降は、より体系的に日本美術を紹介しようとする動きがありました。そのような気運の中、一流の日本美術愛好家たちと広く交流を持っていたビングは、1888年5月から1891年4月まで、彼らを執筆陣として迎えた豪華雑誌『芸術の日本』*Artistic Japan*（*Le Japon Artistique*）を刊



ARTISTIC JAPAN.

the childish games, but somehow the little set seemed to me to have the appearance of an object of use in bygone times, and a long inscription engraved on the box, and one of those very undignified metals seen in objects of value in Japan, doubly confirmed my ideas.

I offered a price which was not accepted, so, with no little disappointment, I left the writing-set, having all the time that feeling of regret one so constantly has when sacrificing some fascinating object. However, in the evening, I was seized with so great a desire to possess the toy that next day I returned *chez* M. Bing.

Alas! it had already been sold to a well-known collector of foreign curios, who, however, in the course of a year or so, tired of his collection of Oriental objects, and, when they were dispersed, I again came across the writing-set at the Prince Sichel's, whence I at last secured it.

The poor little thing remained in my house some time, but little noticed, until at last Mr. Otsouka, a Japanese, recognized that it was a work of the seventeenth century; but no one in the world had the least suspicion that it was the work of any illustrious hand. At last, one day, M. Hayashi, as he was going through my collection, discovered the writing-set in a drawer. I saw his fingers trembling with excitement as if he were touching some precious relic; at the same time he remarked to me, "Do you know that you have been a great curiosity—an object made by one of the forty-seven Ronins?" And, tearing a leaf from a pocket-book he had with him, he directly translated the inscription on the box, as follows:—

大高信清

赤穂臣

ARTISTIC JAPAN.

彫之天和三癸亥季春二月

Which translation may be put thus:—"Carved by Otsoka Nobukiyo, subject of Prince Akao, in 1683, at the end of spring-time."*

Without doubt, then, this little writing-set, this tiny toy, was made by a vassal of Prince Akao—by one of the forty-seven heroes who devoted themselves till death to the cause of avenging their lord and master—by one of those men whose memory has become a form of religion in Japan; in that country where they worship chivalry and valour, and where, according to M. Hayashi, of all our European literature only the plays of Shakespeare and the tragedy of *Le Cid*, by Corneille, are considered worthy of attention.

A curious fact this, in the history of the human race, that this great act of devotion, accomplished in feudal times by a family of vassals, should be, for two centuries after, celebrated in the art, drama, and literature of Japan.

A Daimio of the name of Takumi-no-Kami, charged with a message from the Mikado to the Court of Yedo, was deeply insulted by Kotsuke,† one of the great functionaries of the Shogun.

It is against the law to draw the sword within the walls of the palace, and in doing so the risk is run of death and the confiscation of property. Takumi was master of himself in spite of a first affront; but at the second he could no longer contain himself, and rushed upon his enemy, who, being but slightly wounded, was able to escape.

Takumi was condemned to disembowel himself, and his family were reduced to poverty, and his retainers fell to the level of Ronins—rogues and vagabonds, according to the Japanese expression. But Kurosouki, the chief counsellor of the Daimio, and forty-six Samurai attached to his service, had

* The date of the making of the object, if it is correct—the Prince of Akao being now reported in Mikado-sama to have died this little writing-set was manufactured before Otsoka was a Ronin and a member of Kurosou-sama's, but, according to the custom in Japan, people who had an idea of becoming professional artists carried samples to show therefrom, and so Otsoka, as a member later on, may have made gifts by the assistance of his younger days.

† Date of Old Japan. A. Stobart, Macmillan, 1894.

1888年10月第6号の論文は、エドモン・ド・ゴンクールが発見した赤穂藩士※制作とみられる携帯用筆記具の「矢立て」とエドモンが日本人美術商 林忠正から聴取した赤穂浪士の物語について書かれている。左ページには、歌川国芳『誠忠義士伝』を基にした赤穂浪士の挿絵が、また両ページにまたがり「矢立て」に記されていた銘文の翻訳が掲載されている。

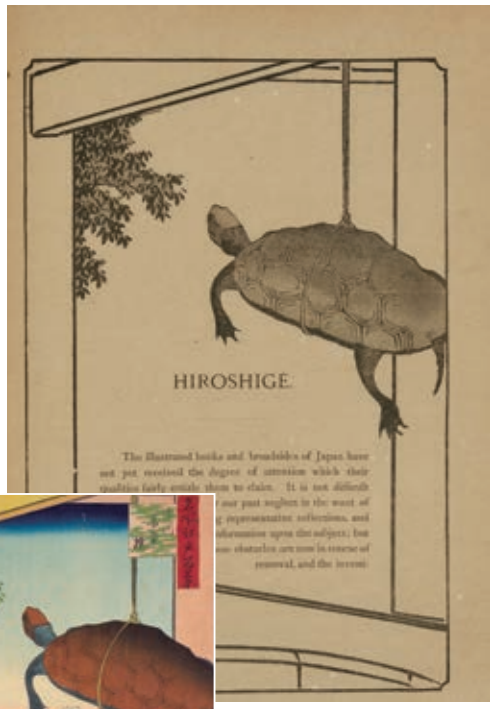
※資料本文では、「大高信清」という名で四十七士の一人であったと書かれているが、「大高源吾」もしくは「大石信清」の間違いではないかと推察される。

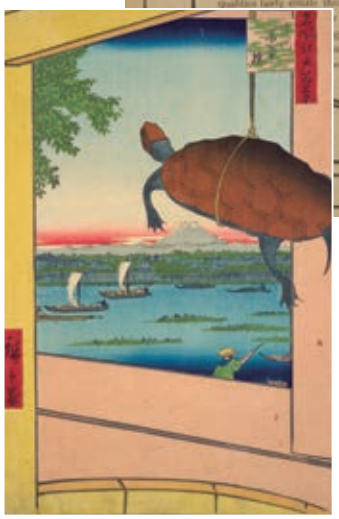
行しました。

今回取り上げるのは、この月刊雑誌『芸術の日本』の英語版です。フランス語版、ドイツ語版と同時に刊行された本誌は、ビングがイギリス人美術商のマーカス・B・ヒューイッシュ（1845-1921）から監訳協力を得ることで実現しました。発行部数は残念ながら不明ですが、フランス、イギリス、ドイツに加えてアメリカにも流通し、日本美術を紹介する出版物としては、それまでに類を見ない国際的な雑誌となりました。

浮世絵などを複製した鮮やかな表紙を開くと、フランス語による初めての日本美術研究書である『日本美術』を著したルイ・ゴンス（1846-1921）や、兄弟での制作活動が有名なゴンクール兄弟の一人である文学者エドモン・ド・ゴンクール（1822-1896）など、錚々たる執筆者による日本美術や日本文化に関する論文が毎号1本掲載されており、日本に関する幅広い知識を提供します。さらに、各号の巻末には日本美術の精巧な色刷り複製図版を10点ほど収め、論文テキスト部分には絵手本（例えば、『北斎漫画』や『一筆画譜』など）のスケッチを散りばめるなど、視覚的にも魅力あふれる仕上がりとなっています。当館で所蔵する本誌は全36号を6分冊に合本したものとなりますが、実際

論文の扉絵にも、浮世絵などのモチーフがあしらわれている。1889年7月第15号（歌川広重に関する論文を掲載）と1890年2月第22号（日本美術の中の動物に関する論文を掲載）は、歌川広重『名所江戸百景』の「深川万年橋」と「深川洲崎十万坪」が元である。





「名所江戸百景　深川万年橋」歌川広重（1世）画　［魚屋栄吉］［安政4（1857）］（『名所江戸百景』所収）https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1312292

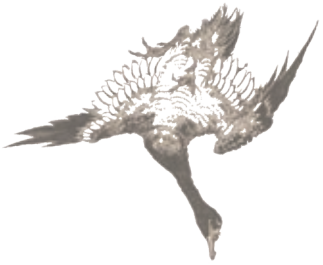
「名所江戸百景　深川洲崎十万坪」歌川広重（1世）画　［魚屋栄吉］［安政4（1857）］（『名所江戸百景』所収）https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1312343

の雑誌1冊は33×25cmと大きく、厚みも紙質が良いため1cm程の大きさです。

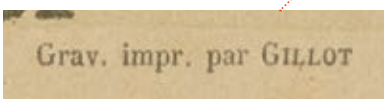
ビングは、創刊号に寄せた論説「序論」の中で、この雑誌の刊行意図を語ります。当時の西欧では、日本美術への理解が表面的なものにとどまり、本物の日本美術品と輸出用の低質な日本美術品の区別がつかなくなっており、正しい観察眼を養うために本誌を企画したのだと言います。具体的には、本物の日本美術品に忠実な複製を紹介することで、日本美術の本質を正しく紹介しようとしたのです。

あわせて、「序論」の後半では、本誌が産業美術の将来に関心を持つ人々に向けられていることも示しています。装飾図案も含む豊富な図版を持つ本誌を、単純なモチーフの模倣ではなく、日本人の考案したモチーフから普遍的な指針を引き出し、自らの芸術に応用することを期待していたのです。長らく工芸品を絵画や彫刻よりも下位においていた西欧において、日本の工芸品の芸術性は新鮮に捉えられていました。日本では生活そのものを芸術とみなしている、という彼らの認識が、『日本の芸術』ではなく『芸術の日本』というタイトルにもあらわれています。

『芸術の日本』の刊行期間はわずか3年でしたが、これは雑誌の長期化による読者離れ



当記事には、1888年5月創刊号から抜き出したスケッチを散りばめている。これらは葛飾北斎の作品を元絵としており、例えば、「三味線を弾く女」のスケッチ（上）は『北斎漫画　1編』に収録された絵手本を元絵にしている。
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/851646/13



1888年5月創刊号に掲載された巻末の複製図版から、森狙仙「猿猴図」（右）と葉のよじれを表した装飾図案（左）。図版端には「Grav. impr. par GILLOT」の文字があり、シャルル・ジロ（1853-1903）が複製図版の制作を行ったことがわかる。「ジロタージュ」という色刷り銅版画技術を用いており、この技法は『パリ・イリュストレ』誌の日本特集号や、画家山本芳翠が挿絵を描いた和歌翻訳集『蜻蛉集』※などにもみられる。
※本誌2017年5月号で紹介。

当館では、合冊製本された英語版とフランス語版の2種類を所蔵している。英語版 *ARTISTIC JAPAN*（右）とフランス語版 *LE JAPON ARTISTIQUE*（左）1889年4月第12号の表紙。表紙絵は葛飾北斎「凱風快晴」（『富嶽三十六景』より）。『富嶽三十六景』からは、「尾州不二見原」と「甲州犬眼峠」も、1889年9月第17号と1890年6月第26号の表紙に採用されている。

を懸念して、本誌の企画当初から遠くない終期が意識されていたことによります。ゴッホやナビ派と呼ばれる芸術家たちにも読まれていたと伝えられており、本誌の刊行後に日本美術の図版集の刊行が増えたことや産業芸術の地位向上に寄与したことが指摘されていることから、多くの人々に読まれ、その影響も広範に及んだことがわかります。

現代の私たちが今、そのページをめくってみても、当時の西洋から見た日本美術の認識の広さと深さに驚くことでしょう。また、誌面に広がる欧文テキストと日本美術のスケッチの融合に面白さも感じます。『芸術の日本』は、時代を超えて、海を越えて、今も人々を魅了し続けています。

○参考文献
サミュエル・ビング 編、大島清次［ほか］翻訳『芸術の日本　1888～1891』美術公論社　1981<請求記号 K81-72>
Akiko Mabuchi（series editor）: *Le Japon artistique-Artistic Japan-Japanischer Formenschatz, 1888-1891 volume 1 (Western sources of Japanese art and Japonisme series ; 8)*, Edition Synapse, 2013<請求記号 K81-B75>
大島清次 著『ジャポニスム　印象派と浮世絵の周辺』美術公論社　1980<請求記号 KC57-5>
ジャポニスム学会 編『ジャポニスム入門』思文閣出版　2000<請求記号 K71-G21>
山内昶「<Le Japon artistique>におけるimage japonaise」『甲南大學紀要　文学編』66: 1987<請求記号 Z12-1>
Weisberg, Gabriel P "On Understanding Artistic Japan" *The Journal of Decorative and Propaganda Arts Vol. 1* (Spring, 1986), pp. 6-19, Florida International University Board of Trustees on behalf of The Wolfsonian-FIU

Collections of Yoshio Kishi

あるアジア系アメリカ人が遺したもの

—ヨシオ・キシのコレクションより—

みなさんこんにちは、国立国会図書館職員の松田恵里です。私は 2017 年から 1 年 3 か月、国立国会図書館の憲政資料室において日系移民に関するアーカイブズ資料の整理を担当し、その後、2018 年 9 月より 2 年間、長期在外研究員としてニューヨーク大学のアーカイブズ及びパブリックヒストリープログラム修士課程で勉強をしてきました※。

実は偶然にも、国立国会図書館とニューヨーク大学には資料を通したちょっとしたつながりがあるのです。憲政資料室が収集している日系移民関係資料の一つである「キシ・コレクション」の片割れが、ニューヨーク大学図書館にあるアーカイブズに所蔵されているのです。「キシ・コレクション」の元の所蔵者はニューヨーク生まれの日系 2 世ヨシオ・キシ（1932-2012）でした。

今回は、キシと深いつながりのあった歴史家のディラン・イェーツさん（Dylan Yeats）に、キシとの思い出を話してもらいました。私がディランさんと出会ったきっかけは、ニューヨーク大学の一組織であるアジア・太平洋諸島系米国人協会（Asian/Pacific/American Institute、以下「A/P/A」）から依頼されたボランティア活動でした。A/P/A はアジア・太平洋諸島系のアメリカ人に関する資料を収集して、ニューヨーク大学のアーカイブズのコレクションに保存する活動をしています。私がニューヨーク大学に在学中、上海生まれ香港育ちのニューヨークで活躍する彫刻家ミン・フェイ（Ming Fay）の資料を、彼のスタジオで整理しニューヨーク大学図書館のアーカイブズに送るというプロジェクトがありました。ディランさんはコンサルタントとして、私はアシスタントとしてこのプロジェクトに参加していたのでした。

ディランさんへのインタビューから、キシの人となりがどのようなものであったか、なぜアジア系アメリカ人の資料を集めることになったか、キシの集めた資料はどのようなものだったのかをよく知ることができると思います。また、キシが集めた資料を具体的にイメージしてもらうために、当館所蔵の「キシ・コレクション」とニューヨーク大学図書館所蔵の「ヨシオ・キシ及びアイリーン・ヤーリン・スンコレクション」の中から、とっておきの資料をいくつかご紹介します！

※本誌 2019 年 6 月号もご覧ください

（ボランティアの時の写真）左から、ディランさん、パーカー・フェイさん（ミン・フェイのご子息で、一緒に資料整理をしました）、松田。

第5回

あの人の蔵書

国立国会図書館所蔵 キシ・コレクション

国立国会図書館憲政資料室で所蔵している「キシ・コレクション」はアジア系アメリカ人に関する洋図書を中心とする約 1700 冊から成り、憲政資料室の日系移民関係資料※の中でも大きな規模を誇るとともに、アジア系アメリカ人の軌跡を伝える貴重な資料です。当館は「キシ・コレクション」を、キシ本人から 1981 年に購入しました。購入当初は“Asian American Collection”とも呼ばれました。

キシは、映画やテレビの編集の仕事に携わっていたほか、アジア系アメリカ人に関する資料の収集、時には販売を行っていました。キシ・コレクションには、日系のみならず、中国系、フィリピン系などアジア系アメリカ人に関する学術的な調査研究書のほか、アジア系移民による文学作品や児童書も含まれています。

※憲政資料室では、中南米、北米、ハワイ等の日系移民に関する資料を所蔵しています。個人が収集した刊行物コレクション、日記・手紙・メモ・写真や聞き取りカセットテープ、団体由来の書類や刊行物などがあります。

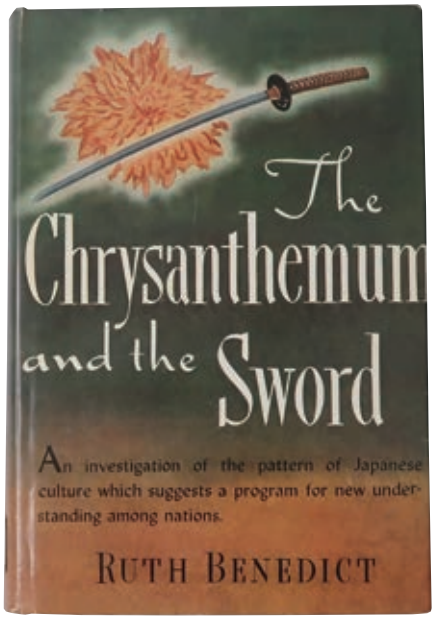
憲政資料室のキシ・コレクションの一部を並べたもの。中には日本語で書かれたものも。

■キシ・コレクションの利用について

キシ・コレクションは請求記号が「VE1」から始まり、東京本館憲政資料室で所蔵しています。冊子目録を当館ホームページで公開しています。
https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/ve1.php

日本人著作や日本の文化を紹介するもの、日本を脅威として扱うもの、日系アメリカ人に対する差別を検証した本など、様々です。

1893 年にアメリカに渡った詩人、野口米次郎の著作。
※中央の *The American diary of a Japanese girl* については本誌 2020 年 2 月号で紹介。



代表的な日本人論『菊と刀』の初版。
The chrysanthemum and the sword patterns of Japanese culture by Ruth Benedict
World Publishing, 1967

■ Yellow Pearl（黄色い真珠）

本書は憲政資料室とニューヨーク大学図書館のどちらも所蔵している資料です（当館請求記号 VE1-1027）。1950 ～ 1960 年代のアフリカ系アメリカ人の公民権運動に影響を受け、アジア系アメリカ人たちも自らの社会的地位の向上を目指す運動を活発化させていきました。その中でも、この資料を作成した Basement Workshop は、アジア系アメリカ人の若者のアートや政治活動を支える包括的組織として 1973 年に発足しました。本書には、30 人以上のアーティストによるアート、音楽、詩などが箱に詰められています。タイトルは、アジアそのものやアジア系アメリカ人の文化の価値への敬意を表現しつつ、“Yellow Peril”（黄禍論※）をもじっています。

“Yellow Pearl,” Basement Workshop Inc., 1972.
（写真はニューヨーク大学図書館所蔵のもの）

※黄禍論とは、黄色人種の台頭が白人文明ないし白人社会に脅威を与えるという主張のことを指します。

ニューヨーク大学図書館所蔵
ヨシオ・キシ及びアイリーン・ヤーリン・スンコレクション

“Yoshio Kishi & Irene Yah-Ling Sun Collection of Asian Americana made possible in large part in memory of Dr. Wei Yu Chen; Fales Library and Special Collections, New York University Libraries.”

キシは、ニューヨーク大学フェイルズ図書館にもアジア人やアジア系アメリカ人に関する資料を販売しており、この「片割れ」は同大学において「ヨシオ・キシ及びアイリーン・ヤーリン・スンコレクション」（Yoshio Kishi and Irene Yah-Ling Sun Collection）として保存されています。憲政資料室で保存する資料が図書中心であるのに対し、ニューヨーク大学図書館が所蔵するコレクションは本や雑誌のほかに、ポスター、フィルムやポストカードなど、幅広い種類の資料で構成されています。

■ Doerner & Gunther (lithographers), “No more Washee Washee, Melican Man Wear Celluloid Collar & Cuff,” trade card, c. 1880s.

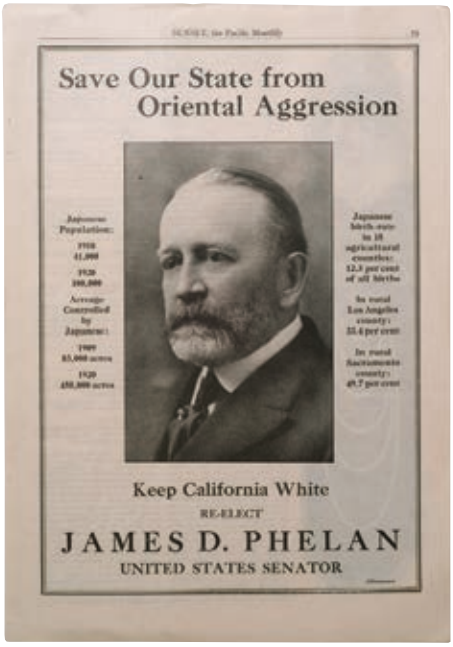
このカードはセルロイド製造会社が作ったもので、中国人排斥に向かう当時のアメリカの風潮が読み取れます。1820年代に、取り外しができるワイシャツの襟や袖口が作られましたが、それらはリネンや綿からできていました。1870年代に、セルロイドが世界初のプラスチックとして発明された後、人々は取り外し可能で洗いやすいセルロイド製のワイシャツの襟や袖口を使うようになりました[1]。そのため、人々のランドリーへ行く回数は少なくなりました。

当時、ランドリーでは多くの中国人が働いていました[2]。カードには、中流階級の白人男性が海に浸かってワイシャツを洗おうとしている一方、中国人たちは“Off for China”（中国への立ち去り）と書かれた帆の張られた使わなくなってしまった洗濯桶に乗り、海に出ていっています。海岸では、中国人の洗濯屋がピジンイングリッシュで、“No more Washee Washee, Melican Man Wear Celluloid Collar & Cuff”（もう洗濯することができない。アメリカ人はセルロイドの襟と袖口を得てしまった。）とつぶやいています。労働組合の指導者たちは、1882年の中国人排斥法成立以降、中国人や中国系アメリカ人をたびたび仕事から締め出そうとしていました。

1 Barbara Schock, “Celluloid Collars,” Carl Sandburg Historic Site Association, https://www.sandburg.org/SandburgsHometown/SandburgsHometown_CelluloidCollars.html#:~:text=The%20detachable%20shirt%20collar%20was,rest%20of%20the%20nineteenth%20century.&text=Linen%20and%20cotton%20collars%20were%20heavily%20starched%20to%20make%20them%20stiff.

2 “NO MORE WASHEE WASHEE:” SELLING CUFFS AND COLLARS IN 19TH CENTURY AMERICA,” AHLSTROM APPRAISALS VALUATION SERVICE, https://ahlstromappraisals.com/art-history-blog//no-more-washee-washee

Yoshio Kishi & Irene Yah-Ling Sun Collection

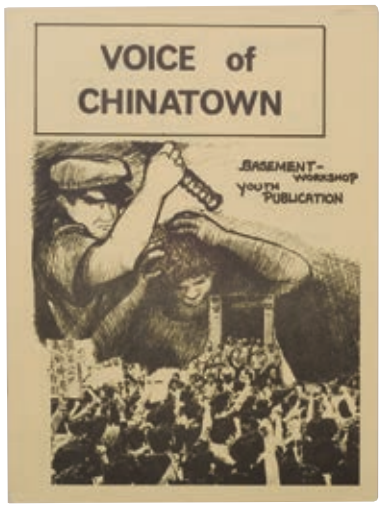


■ “Save Our State from Oriental Aggression,” political advertisement, 1918.

「我々の州を東洋の侵略から守れ」と書かれたこの選挙広告から、西海岸に定住した日本人も、中国人と同じく、社会的・法的な障害に遭遇していたことが読み取れます。元サンフランシスコ市長で上院議員であったジェームス・フェラン（James D. Phelan（1861–1930））は、上院議員再選を目指すこの選挙広告で、日系移民を“Oriental Aggression”（東洋の侵略）と表現し、“Keep California White”（カルフォルニアを白いままに）をスローガンにして、白人ナショナリズムに拠った政治的アピールを行いました。日系移民の排斥を目指したフェランの活動は、日本人のアメリカへの移民を禁じる内容を含む 1924 年移民法（Immigration Act of 1924）の制定に影響を与えました[3]。

3 Brian Niiya, “James D. Phelan,” Densho Encyclopedia, https://encyclopedia.densho.org/James_D._Phelan/

■ “Voice of Chinatown – Youth Publication,” Basement Workshop, c.1975.



Voice of Chinatown は、Basemanet Workshop（7 ページ参照）による、若者たちが政治的、または芸術的にどのように自分たち自身を表現していくかを学ぶ機会を与えるプログラムでした。この冊子はプログラムに参加した若者たちが作成したもので、警察による暴力の実態、アジア系アメリカ人に対するステレオタイプ、チャイナタウンでの生活の様子などが書かれています。1970 年代のアジア系アメリカ人の若者が、アメリカでアジア人として生きることに意味を見つけようとしていたことや、自分達の物語を表現しようとしていたことを感じられる本書を、キシは重要視していたのかもしれません。

※ 7 ページの *Yellow Pearl*、ならびに 8-9 ページの各資料の解説は、以下を参考にしました。
“Yellow Peril” Collecting Xenophobia A Visual Essay from the Yoshio Kishi / Irene Yah Ling Sun Collection, Fales Library & Special Collections, New York University, Asian/Pacific/American Institute, New York, 2007.

（URL 最終アクセス日：2021 年 3 月 31 日）

Interview with Dylan Yeats

ディラン・イェーツさん インタビュー

ディラン・イェーツ
(Dylan Yeats)

2017年にニューヨーク大学で米国史の博士号を取得。歴史家。「文化論争」が、宗教、人種、階級、ジェンダー、セクシャリティに対するアメリカ人の理解をどのように形作ってきたかが主な研究テーマ。共著に、「Yellow Peril! An Archive of Anti-Asian Fear」(Verso, 2014、当館請求記号 EC136-B172)。ニューヨークにおいて、展示やコミュニティメモリープロジェクトのキュレーターやコンサルタントとして活躍。ニューヨークの歴史に関するウォーキングツアーガイドやアーキビストとしての仕事もこなす。

このインタビューは2020年2月28日に実施しました。

――はじめに、キシさんと知り合った経緯を教えてもらえますか？

2005年に、ヨシ※のアシスタントとして働き始めたのがきっかけでした。A/P/Aがヨシの持っている資料を中心とした展示「Yellow Peril」を企画していたのですが、私は彼の持っている資料の中からどれを展示するかを選ぶ手伝いをすることになりました。それで、展示に関する仕事が終わった後も、彼のコレクションをニューヨーク大学に売るための準備をする仕事を始めました。コレクションはヨシにとって、とても大切なものでしたから、この仕事は時間がかかりました。毎週彼のもとに通いましたが、2、3年は必要でした。資料の整理もそうだけど、彼の代わりに買い物に行ったり、掃除をしたりもしましたよ。

ヨシは気難しいひとでしたが、私は彼と良い関係が築けたと思います。彼は人間よりも資料が好きな人でしたが、次第に私のおじいさんのような存在になっていましたからね。そこで、私は、「ニューヨーク大学へ売る予定の資料の整理が終わっても、家に残っているそれ以外の資料の整理を一緒に続けますよ」と提案しました。

――キシさんとはとても長い付き合いだったのですね。ディランさんから見て、キシさんはどんな人だったか教えてもらえますか？

ヨシの人生は私が本を書きたいと思っているくらい興味深いものでした。彼は、人間というものを信用できていなかったのだろうと思いますが、本当に

※ディランさんは、ヨシオ・キシのことを、親しみを込めて「ヨシ」と呼んでいたそうです。

About Yoshio Kishi

チャーミングで面白くて楽しくて頭のいい人でした。シニカルで、物事に批判的なユーモアを持つ人で、彼とはたくさん話しましたが、一緒にいて楽しかったですね。

実は、ヨシは最初から私を信用してくれていたわけではありませんでした。

作業中のキシとディランさん。

私の祖父母が、ヨシが育ったマンハッタンの一地域であるヘルズキッチン近くの出身だと分かってから、彼は私を信用してくれるようになりました。ヨシは、私に祖父母のことを思い出させました。祖父母と全く同じアクセントを持っていましたし、缶詰に入ったスモークされた貝、クラッカー、パストラミ、チーズケーキとコーヒーとか、同じような食べ物や飲み物が好きでした。とにかく、ヨシは私の祖父母と同じような雰囲気を持っていました。当たり前ですよね、ほぼ同じ時代に同じ場所で育ったんですから。そして最終的には、彼はプロフェッショナルとしての仕事も含めて私を信頼してくれるようになりました。

――面白そうな人ですね。会ってみたかったなあ。もしよければ、キシさんの家族のことについても教えてもらえますか？

父エイキチは、１８８１年栃木県生まれ、母ハルは１９０３年東京府生まれでした。エイキチは単身アメリカに渡り仕事をしていましたが、１９２１年に一時帰国していた時にハルとお見合い結婚をしました。ハルは18歳、エイキチは40歳でした。翌年、ハルはエイキチとともにニューヨークに移住しました。エイキチはポーカー酒場経営、電気用品店の店員など、様々な職を転々としていたようです。２人には５人の子どもがおり、ヨシは４番目の子どもでした。ハルの実家は比較的裕福だったようですが、エイキチの仕事がうまくいかなかったこともあって、ニューヨークでの生活はけっして楽なものではありませんでした。しかもハルは夫のエイキチ以外にはじめは頼る人もいなかったのです。ハルは外に働きにいったり、内職をしたり家計を支えるために努力していたようです。

ハルが日本語で書いた手記がニューヨーク大学図書館のコレクションに収められているのですが、悲しい内容でした。ニューヨークの生活に慣れないばかりでなく、エイキチからはあまりよい待遇を受けなかったようで、手記にはエイキチに対する不満が綴られていました。救いだったのは、ヨシに対するお礼も書かれていたことです。晩年のハルはヨシと一緒に生活をし、好きな絵などを好きなだけ描ける環境を

1934年のヘルズキッチン（キシが生まれたくらいの時期のもの）。
10th Avenue and 38th Street, Eastern View. Box 12: Folder 2A. Seymour B. Durst Old York Library collection of photographs and lithographs. Avery Drawings & Archives, Avery Architectural and Fine Arts Library, Columbia University

ヨシに用意してもらうことができていたからです。

――当時のニューヨークで、日本人として生きることは、簡単なことではなかったのかもしれませんね。さて、キシさんのキャリア人生は映画編集から始まりました。なぜ彼は映画に関わる仕事をしようと思ったのでしょうか？

ヨシと彼のお父さんエイキチとの関係が影響していると思います。エイキチは1世で、英語をあまり話すことができませんでした。なので、日本語ができないヨシと英語ができないエイキチは、うまくコミュニケーションが取れませんでした。でも、エイキチはよくヨシを映画館に連れて行きました。映画は、お互いに話すことのできない2人が一緒にすごせる数少ない方法だったんです。その思い出から、ヨシは映画に惹かれていきました。

もう一つ、ヨシを映画の道に進ませたのは「勘違い」でした。ヨシは、8歳くらいのとき、遊んでいる最中にごみにつまずき転んで、左目にけがをしてしまいました。それによって彼の左目はほとんど見えなくなってしまいました。さらに、ある日学校の授業でアメリカンフットボールをするのを強制されたことがあって、右目にもボールが当たってそちらの目も不自由になってしまいました。彼は生涯を通して何度も目の手術を受けて、目についてはとてもセンシティブでした。部屋もいつも暗くしていましたよ。そして彼が大学生だった時、エドゥアルド・ティッセという映画監督が眼帯をしている写真が載っている本を見つけて、ヨシはティッセが片目で映画を撮ったのだから自分だってできるって思ったそうです。でも数年後にヨシは、眼帯と思っていたものが実は、本についていたただの小さな紙切れだったことに気づきました。少し皮肉なことですが、彼が映画の仕事についた一つの理由は、「勘違い」が元だったと言えるかと思います。

――いろいろな経験が重なりあって、キシさんは映画編集の道へ進んだのですね。さて、アジア系アメリカ人の資料収集は、映画編集と同じくキシのライフワークとなりましたが、なぜ彼はアジア系アメリカ人の資料を集めだしたのでしょうか？

いくつかの理由があると思います。ヨシがアジア系アメリカ人の資料を収集することにした大きな理由は、彼のお父さんを知ろうとする彼の人生を通した情熱が大きな理由だったと思います。彼は、自分が話すことができなかったお父さんについてもっと深く知りたかった。その答えを、資料の中に求めたのでしょう。

それに加え、ヨシがアジア系アメリカ人運動に熱心であったことも、影響を与えたと思います。実際に、ヨシが映画の世界から去ったのは、アジア人に対する人種差別も大きかったようです。彼の友人で中国系アメリカ人女優のアイリーン・ヤーリン・スンや彼のお母さんもアジア系アメリカ人運動に熱心でヨシに活動を勧めました。

また、1960年代、ヨシのお父さんが亡くなった後、彼はニューヨーク公共図書館に調べ物をしに行ったのですが、「日系アメリカ人」という分類を見つけることができず上手く調べることができませんでした。それからヨシは図書館というものに懐疑的で、図書館

About Yoshio Kishi

キシとキシの部屋。3000冊以上もの本があったとのことです。

の仕事を信じないようになりました。その経験も、ヨシが自分で資料を収集し始める大きな要因だったと思います。ちなみに、1980年代後半、ヨシは映画の仕事は辞め、お母さんの介護に集中することになってから本のディーラーを始め、様々な分野の本を収集し始めました。アジア系アメリカ人に関するものだけではなく、オペラに関するもの、初期アメリカ文学、映画や写真に関するもの、売春婦に関するもの、ミステリーに関するものなども集めました。

――お父さんとの関係、アジア系アメリカ人運動に対する思い、情報の扱いに対する問題意識から、キシさんは資料収集の道へ進んだのですね。私は図書館員として、キシさんの図書館に対する懐疑的な態度は、考えさせられるものがあります。

実際に、ヨシの図書館に対する用心深い態度がよく分かるエピソードがあります。彼は資料をニューヨーク大学に送るにあたって、100項目以上にわたる分類を独自に作って、しっかりとしたリストを作るまで資料を送ろうとはしませんでした。ヨシは自分で本を購入し、分類をつけることで、他の人が簡単にアジア系アメリカ人の資料を探せるようにしようと考えました。昔は、アジア系アメリカ人に対して、「inscrutable oriental」（理解することのできない東洋人）という差別用語があったのですが、キシは自分のコレクションを「scrutable image collection」（理解することのできるイメージコレクション）と呼びました。彼は大きな本棚を使って、全部が見えるようなコレクションを作りたかったんです。

――ディランさんは、キシさんの人生についてどのように感じていますか？

ヨシの人生は寂しそうに見えるかもしれませんが、彼は自分の人生を愛していたと思います。彼の部屋のダイニングテーブルにはいつもたくさんの本や新聞、雑誌が置いてあったのですが、毎週テーブルの上に違った資料が置かれていました。彼は本をたくさん読んでいたのでしょう。最終的には、本を読んで映画を見るという、彼にとっての理想的な人生を送っていました。そ

ニューヨーク大学図書館の特別コレクション閲覧室。フェイルズ図書館の所蔵資料だけではなく、ニューヨーク大学のほかの図書館の所蔵資料も見ることができます。
CannonDesign (architecture), Scott Frances (photography)

の生き方は私たちが望むような生き方と違うかもしれませんが。彼は貧しい家庭で育って、いろんな人から差別されたり拒否されたりした経験もあったことから、望むものが映画や本だったのだろうと思います。それに、彼は夢を叶えました。大切な友人のアイリーンが女優として成功した、彼のコレクションをいろんな人が見ることができるようになった、そして最後にお母さんを幸せにすることができました。

――キシさんとの出会いはディランさんにどんな影響を与えたでしょうか。

私は歴史学の学生でしたが、実はYellow Perilの展示に関わる前まで、アジア系アメリカ人の歴史がどれほど重要なのかについてそれほど気づいていませんでした。でも、実際にアジア系アメリカ人への差別に関するたくさんの資料をひとつの場所で見たことは、その後の歴史家としての自分のキャリアに大きな影響を与えました。この国で過去に起こったことが具現化されたものを間近に見ることで、私は歴史に対して本当に深い興味を持つことができるようになりました。

ヨシのコレクションは、ニューヨーク大学内のアーカイブでもピカイチだと思います。第二次世界大戦中に強制収容所で日系人や日本人移民によって作られた新聞、同世界大戦中のサンフランシスコの中国系アメリカ人の日記、アジア系アメリカ人に対するステレオタイプがわかる資料、70年代のアジア系アメリカ人運動に関する資料などのレアで貴重な資料が含まれています。ただ、重要な資料なのにそこまで利用されていないので、とても残念だと思います。

本や雑誌などのメディアが表すイメージやストーリーは、私たちがある物事に対して持つ考え方や知識を、ある一定のカテゴリー内に制限してしまうことがあります。だから私たちは、与えられるイメージやストーリー、それに基づく憶測などを批判的に見ていく必要があります。当時人気のあったコンテンツが、私たちが「知っている」アジア系アメリカ人に対する見方をどのように強めて来たのか、キシの資料から学ぶことができるのではないでしょうか。

――資料があるからこそ、私たちは歴史をもっと深く知ることができるんですね。批判的に資料を見ることの大切さや、資料収集に込められたキシさんの思いを知ることができました。ディランさん、ありがとうございました！　これからも研究をがんばってください。

紙よりも時代に取り残される？電子資料

東京本館新館1階に位置する、ガラス張りの音楽・映像資料室。専門室の中でも室内に並ぶ紙の資料が少なくパソコン席が多いので、一見するとパソコンで調べ物をするための部屋だろうかと思うかもしれません。しかし、閲覧席に並ぶパソコンの多くはインターネットに接続しておらず、資料の検索もできません。電子資料を閲覧するための専用席なのです。

音楽・映像資料室ではDVD、CD、レコードといった、名前のとおり音楽や映像を視聴する資料のほかに、CD-ROMのように文書や画像を見る電子資料も扱っています。いずれの資料も、担当職員がインストール等の準備をしてから提供しています。インストールの方法、データの閲覧方法は資料によってさまざまで、一筋縄ではいかないことも。うまく動作しない理由も、OSのバージョンが合わないのか、閲覧に使うアプリケーションが入っていないのか、というように千差万別。次回に備え、自分でメモを作成することもよくあります。

現在流通している資料だけでなく絶版の資料が閲覧できるのは、紙の資料も電子資料も変わりありません。と言いたいものの、成長著しいデジタル業界。私が小学生の時に使っていたフロッピーディスク、就職して久しぶりに再会しました。動作環境OSのWindows98、昔、家にあったなあ。果たしてこれは使えるのでしょうか？

一つの対応策として、デジタル情報を保存する媒体を変える「マイグレーション」を順次行っています。例えば前述のフロッピーディスクやMOディスク、現在のパソコンにおいてこれらのドライブは標準装備ではありません。そこで肝心のデータを、現在一般的に使われているDVD-Rなどに移し替え、そのDVD-Rを利用者の方に使ってもらおう、というものです。他にもUSBメモリ、CD-RW、MDのマイグレーションも行っています。令和3年5月時点では約700点の資料をこの方法で提供しています。パソコンで見る電子絵本やキッズコンピュータで育ってきた身としては、古い電子資料も見られるようにしたい！　という個人的な思い入れはあります。

もとの資料がすでにデジタル情報の資料であるため、よく耳にする紙資料のデジタル化とは少々異なりますが、マイグレーションは、対応する再生機器、再生環境が必要な電子資料には重要な対策です。

使えるかどうか見ただけではわからない電子資料。時代の変化にさらされて、気づいたら使えなくなっていた……ということのないよう、試行錯誤中です。

（音楽映像資料課　胡麻）

（上）マイグレーション対象の電子資料。
（右）内容を移し替えたDVD-Rを再生する。

本をまもる

保存・修復の道具

① 切る、折る

国立国会図書館では、所蔵する資料の永続的利用を保証するために、デジタル化などの媒体変換、防災、保存環境の整備、修復といった様々な保存活動を行っています。

その活動で大きな役割を担うのが、収集書誌部資料保存課です。資料保存担当の専門職員が、専門的な判断と技術を必要とする補修・修復を資料の特性や状態に応じて行っています。また、書庫の環境管理や虫菌害対策などの業務にも当たっています。

新しいシリーズとして、資料保存課で保存・修復のために使用する「道具」にフォーカスをあててみます。ほんの一部ではありますが、文化的資産を残していく活動の様子を垣間見ていただければと思います。

丸包丁（まるぼうちょう）

和紙や裏打ちした布を、まっすぐにほつれずに裁つために使います。表具屋さんなどでよく使用する道具です。刃先が丸くなっているため、丸包丁と呼ばれます。

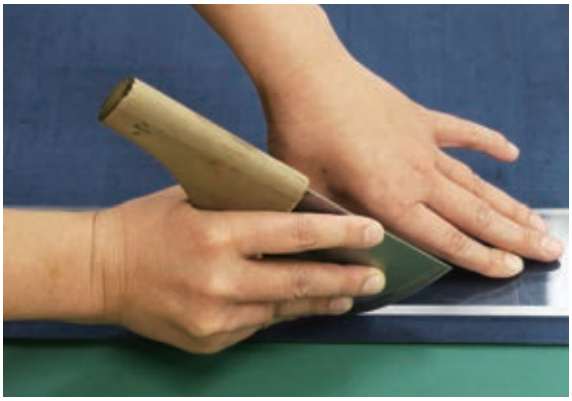
※紙や布の裏面に和紙をデンプン糊で貼り付けて、丈夫にすること。

横に置いたのは鞘です。母の古い着物を使って自分で作りました

たとえば、巻物を裏打ちして補修するとき

巻物よりも少し大きめの和紙で裏打ちして、あとから余白を裁ちます。

余白部分を裁っているところです。



真横から見るとこんな感じです。

のこぎり

本の背に切り込みを入れるときに使います。ほかにも、巻物・掛け軸用の木の軸棒や紙筒を切るのに使うこともあります。

ホームセンターで売っている普通ののこぎりです。いろいろ種類がありますが、同じ作業でも職員によって使いやすいものが違うので、それぞれ手になじむものを選びます

たとえば、本の背を補修するとき

写真集など、綴じる余白が無いような本の場合に、接着剤だけでは弱いので、背にのこぎりで切り込みを入れて、麻ひもを押し込んで接着強度を上げます。

表紙を全てはずし、本体の背に切り込みを入れます。

麻ひもが抜けにくいように、切り込みは互い違いに入れます。

接着剤をつけて麻ひもを溝に押し込んで、さらに背に接着剤を塗って固めます。

へら

素材は竹製、動物の骨製など、いろいろあります。動物の骨でできているものは、「ホーレン」と呼ぶこともあります。

紙を折ったり、筋目をつけたり、補修した個所を撫でて接着したり、紙を剥がしたり、といろいろな用途があります。

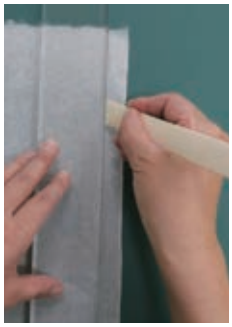
いろいろな用途に使います

竹へらで和装本の表紙を折り込む様子です。

枚数の多い紙や、厚い紙を折るときも、へらを使うときれいに折れます。

溝もへらでつけます。

補修に使う帯状の和紙を作る時にも、へらを使います。（本誌 2015 年 10 月号「和紙、大活躍!!」もご参照下さい。）



水をつけた筆で和紙に線を引き、へらで筋をつけ、手でちぎります。

印刀（いんとう）

先輩が作ったものを引き継いで使っています。手になじんだ長さ、形があるので、これがないと仕事ができません

本来は、印を彫るときに用いる道具です。当館では、虫食い穴を和紙で補修するときに、和紙を上から押さえて虫食い穴の形にちぎったり、糊を付けて和紙を貼った後に押さえて接着するために使います。アクリル製は職員の手作りです。下が透けて見やすい等の利点があり、アクリル製をおもに使っています。

たとえば、和装本の虫食い穴を補修するとき

虫食い穴のまわりに筆で糊をつけます。

虫食い穴の上に和紙を貼り、穴の大きさに合わせて印刀で押さえてちぎります。

ちぎった和紙を印刀で押さえて貼ります。

革漉き

本来は革を漉く道具ですが、現在は違う用途に使うことが多くなっています。例えば、左下で紹介している用途の他、薄い和紙を切るためにも使うことがあります。

革漉きの用途　新旧

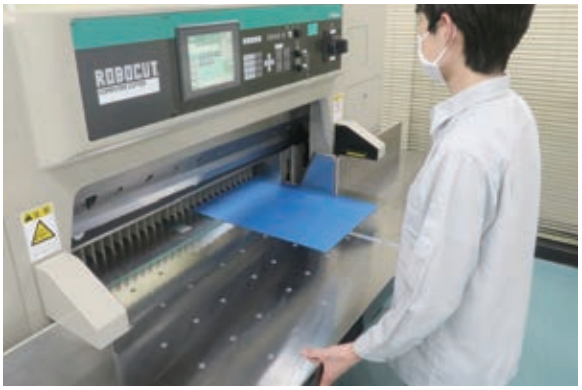
背の部分に接着剤を使った製本形体の本を製本し直すとき、背の接着剤を削り取る「バラ落とし」という作業に使います。

洋書などの革装本の補修をするときに、新しい革を、適切な柔軟性と強度にするため、漉いて必要な厚さにします。現在は本の元の素材を活かす補修をしているので、あまり行われなくなりました。

筋押機

保存箱（資料を劣化・破損からまもるための、中性紙でできた箱）を作る際に、厚紙に折筋をつけるために使います。厚い紙にも簡単に折筋をつけることができ、大変重宝しています。他機関から見学に来た方にうらやましがられることも。

断裁機



表紙に使う布、保存箱にする厚紙、和紙、各種洋紙などを断裁します。大量の紙の束も一度に切ることができます。両手で同時に断裁スイッチを押さないと、刃が作動しないように安全装置が付いています。

穿孔機

本の綴じ直しをするときに穴を開ける機械です。ドリルが垂直に下りてきて、最大6ヶ所同時に穴が開けられます。本の大きさにもよりますが、通常は３～４箇所に穴を開けて糸で綴じます。
資料の形態や状態に応じて、目打ちを使って手で穴を開けることもあります。

※ここにあげた道具とその使い方はほんの一例です。

本屋にない本

作家・太宰治にゆかりの地と言えば、どこが思い浮かぶだろう。終生故郷として彼に影響を与え、名作『津軽』を生んだ青森。幾度の自殺未遂を経て、人生の再起をかけた、『富嶽百景』の舞台・甲府。様々な場所を挙げることができるが、忘れてはならないのが東京の三鷹だ。昭和14年、太宰30歳の年より移り住んだこの地で、彼はその創作活動期間の半分にあたる7年半を過ごし、約90篇もの小説を執筆した。その中には『走れメロス』や『桜桃』など代表作も多く含まれる。そして、三鷹に流れる玉川上水は彼の最期の地ともなった。本書はそんな太宰と三鷹の足跡を紹介する三鷹市美術ギャラリーの展覧会の図録である。

本書は太宰が三鷹に住むようになった経緯やその暮らしぶり、作家仲間との交流などを、書簡や作品、愛用品の数々を交え解き明かしている。掲載された書簡などをじっくり読み込むと、私信でさえも流れるように読ませるその筆力に驚かされ、手書きの文字から太宰の心情が迫ってくるようで興味深い。あまり知られていないが、太宰は趣味として絵筆をとることもあり、彼の描いた絵も本書で鑑賞することができる。

本展覧会の特色の一つが、三鷹の街の発展と太宰の作家としての足跡を重ね合わせていることだろう。かつて農村地帯だった三鷹は、昭和15年に村から町に移行すると、戦中は飛行機工場が空襲の標的となり、戦後は復員兵士のあふれる街として社会の最前線に躍り出た。まさにこの歩みと呼応するように、三鷹に移り住んだ太宰も作家としての地歩を固め、空襲によって一時疎開し、戦後再び三鷹に戻ると『斜陽』で一躍時の流行作家となった。作家と街の符合を伝えるこの視点は、三鷹で開かれた展覧会ならではと思わせる。

本書では「太宰治の街・三鷹」を世界に発信していくことが謳われているが、その取り組みは着実に始まっている。昨年12月には同じく三鷹市美術ギャラリーに「太宰治展示室 三鷹の此の小さい家」として、三鷹時代の家の一部再現がなされた。

どんなに優れているとされたものも、語り継ぎ愛してくれる人がいなければ、やがては消えてしまう。太宰の作品、そしてその人となりを愛し後世に残す機運が、ゆかりの土地・三鷹で高まっていることに、先人の資料を残す職務につく身として、そして太宰治の一ファンとして、大変喜ばしく思う。

ちなみに表紙を飾る刺繍も、太宰の使用していた椅子を拡大したものなのだが、よく見ると故郷・青森を偲ばせる林檎柄。当の太宰が『津軽』で、「その古い伝統を誇ってよい津軽の産物は、扁柏（ひば）である。林檎なんかじゃないんだ。」と述べていることを踏まえると、より面白みが感じられるかもしれない。

（大森穂乃香）

太宰治三鷹とともに
太宰治没後70年　平成30年度特別展
三鷹市スポーツと文化財団芸術文化課文芸担当 編集・発行
2018.6　80p；30cm
<請求記号 KG647-L36>

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

表紙画家セレクション
第三輯

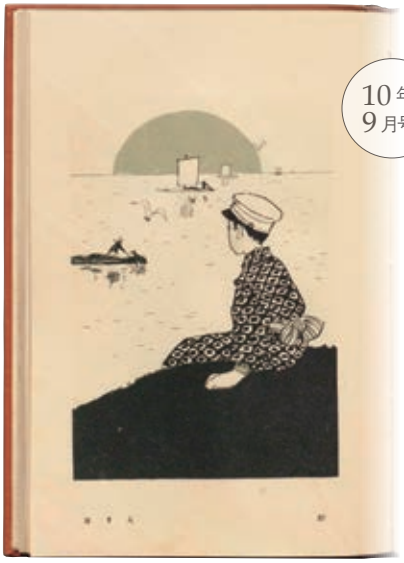
本誌は平成 20（2008）年 4 月号に A4 フルカラーにリニューアルして以来、表紙には、当館所蔵資料の中から、季節に合わせた美しい絵を選んできました。選ばれた絵たちは、浮世絵、作家のこだわりがつまった版画集、美しい口絵で人気を集めた雑誌など、所蔵資料の多様性を表しています。表紙に登場した画家を取り上げ、その中から、「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧いただける絵を集めた「表紙画家セレクション」、第三輯です。

No.9
竹久夢二

（1884-1934）
明治から昭和時代前期にかけての画家、詩人。岡山県出身。早稲田実業学校中退。新聞、雑誌にコマ絵を描き、新進画家として世に出た。つぶらな瞳の愁いを帯びた「夢二式美人」を創始。また、その作詞による「宵待草」の歌が流行した。小間物の図案を手がけ、楽譜のデザインをするなど、生活美術、商業美術の先駆者でもあった。

肖像:『竹久夢二遺作集』竹久夢二［著］有島生馬、恩地孝四郎、竹久虹之助 編　アオイ書房　昭 11< 請求記号 705-4>

10年
9月号



『夢二抒情画選集　上巻』から「入り日」竹久夢二 画　岩田準一 編　宝文館　昭和 2（1927）年　1 冊　23cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1688916/60（国立国会図書館 / 図書館送信参加館内公開）

14年
10月号

『夢二絵手本　1』口絵
竹久夢二 画　岡村書店　大正 12（1923）年　1 冊　23cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1168645/4

No.10

歌川芳藤

（1828-1887）
幕末・明治時代の浮世絵師。江戸出身。姓は西村、通称は藤太郎。別号に一鵬斎。歌川国芳の門人。横浜絵、武者絵などのほか、おもちゃ絵を描き、「おもちゃ芳藤」と呼ばれた。

署名と落款：「FWRANWSWDIN(フランス人）遊戯」歌川芳藤 画　相ト［文久１（1861）年］　１枚　34.8×24.6cm　（『古登久爾婦里』所収）
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1312502

18年6月号

『芳藤手遊絵尽』から「新はん　猫のうなぎや」
歌川芳藤 画　［大正８（1919）年］　温故木版印刷会　42枚　19cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1182659/22（国立国会図書館／図書館送信参加館内公開）

20年3月号

『芳藤手遊絵尽』から「鳥毛物芝居見物」
歌川芳藤 画　［大正８（1919）年］　温故木版印刷会　42枚　19cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1182659/49（国立国会図書館／図書館送信参加館内公開）

国立国会図書館月報

No.11

幸野楳嶺

(1844-1895)
明治時代前期の日本画家。京都出身。本名安田直豊。円山派の中島来章、四条派の塩川文麟らに学び、花鳥画を得意とした。また、京都府画学校を設立し、そこで教えるかたわら、京都青年絵画研究会を組織するなど、日本画の発展と後進の指導に尽力した。帝室技芸員。

肖像：『楳嶺遺墨　伝記・年譜・遺稿　伝記、年譜、遺稿』幸野楳嶺［著］　竹内逸、竹内四朗共編　竹内栖鳳　昭和15
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8311884/6（国立国会図書館／図書館送信参加館内公開）

14年
2月号

「楳嶺花鳥画譜　蝋梅・鸚鵡」幸野楳嶺 画　明治16（1883）年　1枚　35.4×24.1cm（『あづまにしき ゑ』所収）
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1312799

13年
6月号

『楳嶺画鑑　一』から「紫陽花」［幸野楳嶺 筆］　芸艸堂　昭和17（1942）年　1冊　22cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1907225/13

No.12

今 純三

(1893-1944)
大正・昭和時代前期の洋画家・版画家。青森県出身。早稲田工手学校卒。岡田三郎助に油絵を学び、文展、帝展に入選。関東大震災に被災し青森に帰郷、銅版画・石版画の技法研究に取り組む。建築学者・風俗研究者である今和次郎の弟。

肖像：青森県立郷土館蔵

19年
12月号

『青森県画譜　第 1-12 輯』から「青森市新町通夜景」今純三 著　東奥日報社　昭和 8-9（1933-34）年　1 冊　27×39cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1688109/101（国立国会図書館 / 図書館送信参加館内公開）

16年
11月号

『青森県画譜　第 1-12 輯』から「収穫期の林檎園」今純三 著　東奥日報社　昭和 8-9（1933-34）年　1 冊　27×39cm
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1688109/78（国立国会図書館 / 図書館送信参加館内公開）

国会図書館月報

それぞれ見ごたえがあるね！

ミニ電子展示「本の万華鏡」第29回

めーきゃっぷ今昔

――江戸から昭和の化粧文化――

化粧は何のためにするのでしょうか？　慣習や身だしなみとして、美しく装うため、あるいは何かを表現するためでしょうか？　化粧の意味や仕方は、その長い歴史の中で、文化、経済、政治などから様々な影響を受けながら変化してきました。今回の「本の万華鏡」では、江戸時代から昭和に至るまでの化粧文化のたどった道のりを、当時の世相を踏まえつつ紹介します。

目次

第１章　江戸時代の化粧

江戸時代の化粧にはおしゃれのほかに社会規範としての性格もありました。当時の錦絵や美容マニュアル本を紹介します。

第２章　明治、大正、昭和の化粧

洋風化粧品の普及、モダンガールの登場、男性用化粧品の始まりから、第二次世界大戦中の化粧、戦後の多様化する化粧まで一気に振り返ります。

広告あれこれ

1890 年代から 1960 年代までの雑誌に掲載された化粧品広告を紹介します。

本の万華鏡「めーきゃっぷ今昔」はインターネットでどなたでもご覧いただけます。

https://www.ndl.go.jp/kaleido/entry/29/

「本の万華鏡」は国立国会図書館の様々な資料を、インターネットでご覧いただける展示会です。スマートフォンからの閲覧にも対応しています。お手元のスクリーンから資料の世界をお楽しみください。

本の万華鏡　検索

関西館資料展示（第28回）「ニッポン茶・チャ・CHA」

私たちの生活に欠かせないお茶は、関西館の位置する「けいはんな学研都市」がまたがる京都、大阪、奈良と歴史的に深い関わりがあります。特に近隣の京都府南部は、「お茶の京都」として、宇治茶や茶畑景観等に注目した地域振興が図られています。

世界で最も生産されているお茶は紅茶ですが、日本では茶の湯などに代表されるように、緑茶が大きな存在感を持っています。

近年、新しいスタイルの日本茶専門店の登場や、海外での抹茶ブームなどにより、日本のお茶が改めて脚光を浴びています。また、成分の解明や新品種の育成など、科学的な研究も展開されています。

本展示では歴史、文化、産業・科学の切り口から、日本のお茶に関する本と雑誌約70点をご紹介します。ほっと一息、心を潤すお茶の世界に浸ってみませんか。

○開催期間　8月19日（木）～9月14日（火）
　※日曜日は休館
○開催時間　9時30分～18時
○会場　関西館 閲覧室（地下1階）
○入場無料・年齢制限なし
○問合せ先　関西館 資料案内
　電話　0774（98）1341

高橋義雄 編『大正名器鑑 第1編』大正名器鑑編纂所、大正10-15<請求記号 422-74>
足利義政により「初花」と名づけられたと伝わる茶入（茶道に用いる抹茶の容器）。重要文化財に指定されている。

丹波修治 等著、溝口月耕 等画『教草』明治5-9<請求記号 特67-212>　日本として初の公式参加となったウィーン万国博覧会への出品を機に、諸産物の製造過程を木版画にまとめたもの。掲載図は「製茶一覧」の一部。
※紹介画像は「国立国会図書館デジタルコレクション」では2点ともモノクロです。

「第五期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画」の策定

国立国会図書館は、科学技術情報整備のために今後5年間（令和3年度～令和7年度）で取り組むべき事項をまとめた計画を策定しました。この計画は、第13回科学技術情報整備審議会で国立国会図書館長に提出された提言を受けたものです。全文は、国立国会図書館ホームページの「科学技術情報整備に関連する諸計画」に掲載しています。

https://www.ndl.go.jp/jp/collect/tech/plan.html

第34回納本制度審議会

3月25日、第34回納本制度審議会が開催され、審議会委員11名、専門委員2名が出席しました。

審議会では、オンライン資料の補償に関する小委員会の審議経過及び報告書について福井健策小委員長から報告され、質疑応答の後、報告書が原案どおり了承されました。また、この報告書を基に納本制度審議会答申「オンライン資料の制度収集を行うに当たって補償すべき費用の内容について」が決定され、斎藤誠会長から吉永元信国立国会図書館長に提出されました。

この答申は、国立国会図書館長の諮問（平成23年9月20日）に対し、中間答申（平成24年3月6日）を経て、調査審議の結果が総括されたものです。

国立国会図書館は、平成25年7月から、国立国会図書館法（昭和23年法律第5号）に基づき、私人が出版したオンライン資料（電子書籍・電子雑誌等）のうち、無償かつDRM（技術的制限手段）が付されていないものを収集しています。有償又はDRMが付されたオンライン資料は、収集や補償の在り方に検討を要することから、当分の間、国立国会図書館への提供が免除されています。

答申では、この有償等オンライン資料の収集に当たって、DRMが付されていない状態のファイルを収集すべきであること、国立国会図書館以外の者が有償等オンライン資料を長期に保管・提供する場合に、収集対象から除くことができるものと認定する要件を、その長期継続性や利用の担保等の観点に基づき明確化すべきであること、紙媒体の図書・雑誌等と同等の利用であれば、出版ビジネスの阻害には当たらないこと、資料本体への金銭的補償は不要である一方、収集の実効性を高めるためには、政策的補償に相当するインセンティブ（収集済のデータを資料の提供者からの求めに応じて無償で提供するデータバックアップ機能等）が必要であること等が示されました。

このたびの答申を受け、国立国会図書館は、令和4年度中のオンライン資料の全面的な制度収集開始を目指し、関係者との調整を進めます。

納本制度審議会委員・専門委員名簿

（五十音順　敬称略）（令和2年7月29日現在）

会長

斎藤　誠　東京大学大学院法学政治学研究科教授

会長代理

福井　健策　弁護士

委員

植村　八潮　専修大学文学部教授

江上　節子　武蔵大学社会学部教授

江草　貞治　株式会社有斐閣代表取締役社長

遠藤　薫　学習院大学法学部教授

奥邨　弘司　慶應義塾大学大学院法務研究科教授

小野寺　優　一般社団法人日本書籍出版協会理事長

重村　博文　一般社団法人日本レコード協会会長

柴野　京子　上智大学文学部新聞学科准教授

永江　朗　公益社団法人日本文藝家協会電子書籍出版検討委員会委員

根本　彰　東京大学名誉教授

平林　彰　一般社団法人日本出版取次協会会長

堀内　丸恵　一般社団法人日本雑誌協会理事長

山口　寿一　一般社団法人日本新聞協会会長

専門委員

佐々木　隆一　一般社団法人電子出版制作・流通協議会監事

樋口　清一　一般社団法人日本書籍出版協会専務理事兼事務局長

○代償金部会所属委員

奥邨弘司（部会長）、江上節子（部会長代理）、小野寺優、重村博文、根本彰、福井健策、堀内丸恵

○オンライン資料の補償に関する小委員会所属委員・専門委員

福井健策（小委員長）、植村八潮、遠藤薫、奥邨弘司、柴野京子、永江朗、根本彰、佐々木隆一、樋口清一

＊審議会に関する情報は、答申の全文を含め、左記に掲載しています。

ホーム＞資料の収集＞納本制度＞納本制度審議会

https://www.ndl.go.jp/jp/collect/deposit/council/index.html

新刊案内

レファレンス　844号

フランスにおける憲法の公教育無償原則と高等教育―2019年憲法院判決及び2020年コンセイユ・デタ判決を素材として―
中央銀行デジタル通貨の課題
イギリス下院の議員の歳費及び手当に関連する制度
国際機関からの脱退に関する制度―米国の事例を中心に―
フランス軍の公文書管理と情報公開―自衛隊の海外活動に係る日報との比較の視点から―

A4　119頁　月刊　1,000円（税別）
発売　日本図書館協会

レファレンス　845号

トランスジェンダーアスリートと公民権法タイトル9をめぐる議論
各国の輸出管理と対内直接投資管理をめぐる動向
教育データの分析をめぐる欧州の政策動向
英国の政治任用職「特別顧問」（資料）

A4　76頁　月刊　1,000円（税別）
発売　日本図書館協会

カレントアウェアネス　348号

イベントのオンライン化によって得られたもの：図書館総合展の事例
図書館に求められる水害への備え
令和元年東日本台風による川崎市市民ミュージアムの被災と新しい「あり方」の検討
利用者カードをめぐる最近の動向―公共図書館を中心とした―
<動向レビュー>
米国のIMLSが戦略的5か年計画で描くこれからの図書館像―地域変革における触発機能―
オープン査読の動向：背景、範囲、その是非

A4　28頁　季刊　400円（税別）
発売　日本図書館協会

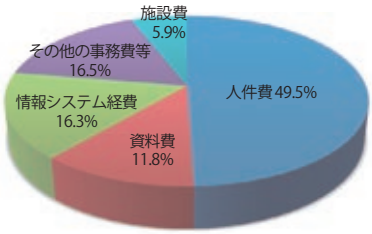
入手のお問い合わせ
日本図書館協会
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14
電話　03（3523）0812

国立国会図書館の令和3年度予算

国の令和3年度予算が令和3年3月26日に成立しました。国立国会図書館の令和3年度歳出予算額は、202億3623万8000円です。その概要は、表のとおりです。

令和３年度歳出予算額	（単位：千円）
（項）国立国会図書館	19,036,415
人件費	10,005,076
国立国会図書館共通経費	179,842
国会サービス経費	253,677
資料費	2,382,491
うち納入出版物代償金	397,476
情報システム経費	3,300,417
東京本館業務経費	1,684,098
国際子ども図書館業務経費	262,374
関西館業務経費	968,440
（項）国立国会図書館施設費	1,199,823
東京本館庁舎整備費	746,803
関西館庁舎整備費	434,928
国際子ども図書館庁舎整備費	18,092
計	20,236,238

予算の費目別構成比（令和3年度）



7/8

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN 2021.7/8

NO.723/724
JULY/AUGUST
2021

CONTENTS

01 <Book of the month - from NDL collections>
ARTISTIC JAPAN—A magazine from western Europe on Japanese art

05 The priceless legacy of an Asian American
—Collections of Yoshio Kishi

06 The Personal Libraries of Well-Known People (5)
Yoshio Kishi Collection, Yoshio Kishi & Irene Yah-Ling Sun Collection

10 An interview with Dylan Yeats

16 Protecting our books—Tools for preservation and restoration
(1) Cutting and folding

24 Artists whose works have graced the cover of the NDL Monthly Bulletin
(Part Three)

28 Kaleidoscope of books (29)
Past and present of cosmetics: Makeup from the Edo period to the Showa era

15 <Tidbits of information on NDL>
Will electronic media become even more outdated than paper?

23 <Books not commercially available>
Dazai Osamu Mitaka to tomoni

30 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

発行所　国立国会図書館
編集責任者　松浦　茂

〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話　03（3581）2331（代表）
FAX　03（3597）5617
E-mail　geppo@ndl.go.jp
https://www.ndl.go.jp/

令和3年7/8月号（No.723/724）
令和3年7月1日発行

印刷所　株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（https://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文　中性再生紙使用

ISSN 0027-9153

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

2021.7/8

国立国会図書館
National Diet Library, Japan

国立国会図書館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。